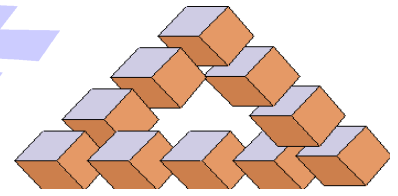


会長の御言葉



No.5 H30.7.17

横浜市小学校算数教育研究会長 小林 広昭

研究主題 「数学的に考える資質・能力を育成する算数科学習」
～数学的な見方・考え方が成長する学び～

主体的・対話的で深い学びを実現する夏の学びを！

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編の4頁に「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善において留意することの一つに次の記述がある。

ア 児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、すでに小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組み蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はないこと

上記のことは、算数・数学の実践の中で本当に積み重ねられてきているのだろうか。確かにすぐれた先輩方の中には、資質・能力を育成するすぐれた実践を展開された方もいたが、その実践が横浜の算数学習の一般として定着したかと問われると、疑問符がつく。

「資質・能力」という用語は、平成4～5年にかけて出版される文部省の「新しい学力観」に関わる指導資料等に見られるようになる。それらの資料に新しい「学力」は、生きて働く力としての諸能力と広義にとらえるもので、「学ぼうとする力」(意欲)、「学ぶ力」(学び方)、「学んで得た力」(知識)と解釈している。20年以上前より3つの要素を上げ、それらを育成することが求められてきているが、なかなか実現していないのが現状である。

私は、横浜市内の小学校における算数科の重点研授業を数多く参観してきたが、30年以上前から行われている知識・技能の定着を目指す、型にはまった問題解決的学習(これが真の問題解決と言えるかどうかはかなり疑問である。)から脱却できないものが多い。

3つの資質・能力をバランスよく育成していく必要が叫ばれている現在でも、知識・技能注入型、知識・技能の量を競う授業から抜け出せない指導者が多いと感じている。そのような教師の中には、まずは知識・技能が先だという者がいる。知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の3つに順序があるのだろうか。「まずは、基礎基本、計算ができない子が考えることはできない。」そのような手前味噌な考えに捕らわれていて、よいのだろうか。今や知識・技能は、機械に任せられ、人が多くもっていることの意味は、希薄になっている。本当に子どもたちに必要な力に目を向けるときである。

漢字力や計算力はどのように付けるか、教師に尋ねると、大概の教師は、ドリルとテストと答えるそうだ。それは、その方法しか知らないからだとある研究者は、述べている。本来、漢字や言葉など知識・技能は、それが必要となる場面が

あり、その文脈の中で学んでいくことが望ましい。私たちは、知識や技能は、必要感の中で学んできた。子どもたちにも、必要感や必然性の中で学びを成立させていくことが、今求められている。

確かに小学校の教師は、複数の教科を担当しているため、算数だけ特化して、時間をかけて授業をすることはできない面がある。だからといって、子どもたちの真の思考力・判断力・表現力を育成することをあきらめてよいのだろうか。学びに向かう力・人間性等を伸ばす努力をしなくてよいのだろうか。ここで、私たち教師があきらめてしまっただけでは、将来子どもたちも困難な状況や問題に遭遇したときに乗り越えることはできないだろう。子どもたちのモデルである教師が、主体的に自らの問題を見いだし、それに向かって取り組み続ける姿を見せなければ、子どもたちが、自立・協働・創造の姿勢をもった人にはならない。

あえて言わせていただく、今こそ教師自身が、自らの主体性を発揮し、自らの課題を明らかにし、対話をもって成長を目指し、今まで以上の学びを求めなければならぬ時期と考える。誰かがやってくれる、教えてくれる、そのような簡単なものではない。本当に真剣に考え、多くの知恵を集めて、互いに刺激し合って、自らの学びを求めなければ、成長は望めないのである。今回の夏季セミナーは、その一つのきっかけになればと考える、開催する。

これからの子どもたちに求められるものの一つに、「自立」「主体性」「自ら」・・・といった視点が上げられる。今までの算数の授業のほとんどは、教師から与えられたものを与えられた指示、教師の思う方向へ進むものがほとんどであった。内発的動機付け、子どもがやりたいに支えられた学習にはなっていなかった面が多々ある。その授業を子どもの主体性、子どもの自身の意思による学習に転換することが求められている。そのために、今回のセミナーでは、子どもの「問い」に焦点を当てる。子どもの思いや願いを引き出し、問題意識を高め、自らの「問い」を意識し、クラスの友達と「問い」の共有しながら、深い学びへ向かう手だてを探る。

これらの取り組みは、何かがわかって終わるという知識レベルの話ではない。ここまでやれば、目指す授業ができるというような技能レベルの話でもない。この取り組みは、教師の意欲を支えられながら、思考しながら絶えず創造を続ける営みである。どこかにゴールがあるのではなく、ある点を通ると、次の問いが見えてくる営みである。その追究が子どもたちの深い学びを実現していくことになると思う。

ぜひとも、夏の暑い一日、一緒に考えましょう。ご参会お待ちしております。

<この「会長の独り言」は、印刷して配付していただいてもかまいません。>